



石澤良昭、『〈新〉古代カンボジア史研究』  
風響社、2013、766p.

### はじめに

著者が刊行した本は数多いが、その多くは注のない一般書であり、研究書としては本書がまさに畢生の大著である。旧著〔石澤 1982〕から 30 年の間に碑文を読み直し、その解釈から歴史像を再構成する地道な作業の成果を一挙に世に問うものである。本書の特徴はなにより碑文史料の精緻な読解と綿密な解釈にあり、その上にとときに大胆な仮説も提示する。主な関心は中央レベルの政治史の推移ではなく（それは一般書に委ねる）、中央の王と王権が地方勢力に根ざしていること、あるいは地方勢力の根強い存在を前提に支配権が編成されることにある。言い換えると、分権的傾向のあるクメール社会において中央権力が維持される基盤を明らかにすることにある。このような問題意識の結果として、一般社会と寺院の関係、その両者と王権の関係という政治経済学の様相や、社会構成すなわち王から下級役人までの支配階層と隷属民の具体的な姿が碑文に基づいて浮かび上がってくる。東南アジア古代史において、このような地方を踏まえた歴史叙述や社会構成を描くことができるとは評者にはおおきな驚きであり、本書はわが国東南アジア史学界の一大金字塔というべき業績である。東南アジア内外の諸地域との比較研究の道を切り開くものとしてもたいへん有意義である。

本書は第 1 部「古代カンボジア史研究の枠組み」（第 1～2 章）、第 2 部「前アンコール時代——扶南とクメール真臘をめぐって」（第 3～6 章）、第 3 部「アンコール時代の政治と文化」（第 7～11 章）の 3 部からなる。「はじめに」と「あとがき」そして若干の付録と索引をあわせて全 766 ページという大著である。つぎに評者なりに概要を紹介し意見を述べるが、カンボジア史の門外漢であり、ま

してや碑文が読めるわけでないのでおのずから限界があり、理解不足や誤解が含まれていると思われるが寛恕願いたい。

### 本書の構成と特徴

#### 第 1 部 古代カンボジア史研究の枠組み

第 1 部は研究史と方法論に関わる解説であり、第 1 章はカンボジア史 2000 年を概観する。時代区分は常識的な前アンコール、アンコール、後アンコール、植民地、民族国家建設の 5 時代が設定される一方、デーヴァラージャ論や農業立国史観など著者の歴史観にもとづく叙述が行われる。この部分で惜しまれるのはバイヨン寺院（ジャヤヴァルマン 7 世）でアンコール時代の記述が終わっていて、13 世紀が欠落していることである。著者の世界的な業績のひとつである廃仏毀釈運動とその後（第 10 章）がなぜかまったく語られていないのである。

ところで、カンボジア史を通観して印象深いのはアンコール時代の栄光とその後の止めどなきがごとく衰退の落差の大きさである。このまま衰微すれば（植民地主義の時代がなければ）モン人やチャム人のように国家なき民族になっていたかもしれない。著者がこのような危機感を共有することは、後アンコール時代を取りあげる最近の論文〔石澤 2014〕にも現れている。

第 2 章は研究史と碑文読解の方法論の解説である。カンボジア古代史の研究は漢籍や美術史、建築史、また考古学の成果などを参照しつつも、碑文の読解が中心である。旧著のころは 1,050 点だったが、現在では 1,250 点以上に増えている。政治史の再構成にとどまることなく、著者は在地社会の姿を読みとる努力をおしまない。この章では 2 つのクメール語碑文（K. 600=611 年、K. 181=962 年）の具体例をとおして、碑文読解の方法論と問題点を解きあかす。様々な限界があるものの、碑文の精密な読みから村の内外の景観、居住者の社会構成、経済生活、物納と労働の税や刑罰などを浮かび上がらせることができる。

## 第2部 1 扶南とクメール真臘

第2部(第3～6章)は前アンコール時代の政治史と社会構成を論じる。第3章「前アンコール時代を発掘する——問題点の整理から」は副題のとおり、前アンコール時代の研究史と主な論点、方法論と仮説の提示であり、第2部全体の序論である。セデス以来のインド化論の内容をどのように再構成するかという課題が強く意識されている。118～120ページに作業仮説6点が提示される。それを評者なりに総合すると、土着の文化が外来のそれを換骨奪胎してカンボジアの個性的文化(いわゆる国風文化)を生み出していくという主張である。その王権論における現れが第8章で提示されるデーヴァラージャ信仰の理解である。

第3章のタイトルは前アンコール時代であるが、政治史はアンコール時代にはみ出している。すなわち、802年で前アンコール時代とアンコール時代に区分する通説の再検討が重要な課題であるため、第3部とくに第7章を強く意識した内容になっている。そのため著者は、じつは前アンコール時代とアンコール時代の間あまり明確な区分を認めていないのではないかの推測が生まれる。

なお、本書はインド化の始まり(とりわけパラモンの渡来)を1～2世紀とする場合(pp.117, 133他)と4～6世紀とする場合(pp.154, 453, 667他)がある。前者はセデスのいう第1次インド化、後者は第2次インド化であり、学界の大勢は前者を否定する方向にあるが、著者はいまなお揺れ動いているようである。

第4章「前アンコール史の展開」では第1節で扶南の成立から真臘の発展と扶南の滅亡までを再検証する。同時代(5～6世紀)の碑文は7点にすぎないため、比較的豊富な漢籍に考古資料や美術史を参照する幅広い議論が展開される。第2節では、598年のバヴァヴァルマン1世に始まりジャヤヴァルマン1世(位657～681頃)に至る5人の王の1世紀間にクメール(真臘)は扶南を併合しただけでなく、ついにジャヤヴァルマン1世がカンボジアの政治的統一をいったん達成する過程が明らかにされる。しかしながら地方勢力が健在でいまだ分権的な国家であった。

第3節ではこの分散的な「長い8世紀」の有力

な地方家系の姿が明らかになる。ソンボー(またはサンボール)に拠点を置くシャムプブラ家系、ダンレーク山脈の北側のアニンディタブラ家系の2大家系だけでなく、その他いくつもの家系の存在が示される。2大家系については6世代以上にわたる系譜が再構成されている(pp.210, 221)。ただし、同時代碑文によるとは限らず、後世の諸王が自身の正統性を主張するために有力家系の中に自身を位置づけたものがあるため、錯綜した議論が展開される。ジャヤヴァルマン2世がシャムプブラ家系に入り込んだのがその一例である。著者はまたこの段階でシャムプブラ家系ですでにデーヴァラージャ信仰が成立していたことを強調する(p.211)。この王権正統性論がジャヤヴァルマン2世によって国家イデオロギーに高められることになる(第7, 8章)。

後代の碑文による系譜の改竄が「後追い政治塗装」(p.228)として常套手段だったらしい。とはいえ、東南アジア古代史においてこのような家系へのこだわりが具体的な何世代にもわたる系譜となって示されるのはカンボジアだけであり、また群雄割拠の分権的状况が史料の根拠をもって示されるのもカンボジアに限られる。たとえばジャワでは少なくとも13世紀以前の諸王はほとんど系譜を語らず、分権的状况はいわば間接的に証明されるだけである[深見2001; 青山2001参照]。なお、扶南と真臘に関する漢籍史料の扱いには引用文の誤字脱字を含めて不正確な点が散見されるのが惜しまれる。漢籍については後にあらためて取りあげる。

## 第2部 2 社会構造分析

第5章と第6章は、どの時代よりもずば抜けて多い7世紀の220点の碑文に依拠する政治経済学および社会構造分析である。こうした碑文の大半は寄進財貨のリストであり、これが豊富な社会経済史料として活用される。第5章は寺院をめぐる政治経済学的分析である。一定の領域をもつ地方政治勢力である郡(プラ)には多くの村(スルック)の他に、神の区域(寺院)があった。この章は郡・村と寺院の関係、この両者と王権の関係を論じる。王が寺院の建立や区画またその免税など

の特権を命じるとはいうものの、王権が常に強固とは限らない。寺院の経済的特権のありようや、寺院の維持と運営のための財貨をめぐる「聖」と「俗」の軋轢が頻発している。寄進主と寺院の関係、寄進財貨の所属や運用の分析がなされ、世俗の権力者・有力者と僧侶の関係には相互依存と対立葛藤の両面があることが明らかにされる。

第6章では人名に必ず付いている冠称の分析に基づいて、政治経済社会を動かしていたのはどのような人々か、社会はどのような階層から成り立っていたかが明らかにされる。上から次の階層があった。①冠称ヴラ・カムラターン・アンは神仏・王・高官に付される。また地域の守護精霊にも冠される。②ムラターンは王に次ぐ中央・地方の実力者、支配階層であった。中央では知識人・儀典官（インド渡来のバラモン出自の者もいた）、侍従などとして王に仕え、婚姻をとおして王族に連なった。地方つまりプラにあっては王と同様の政治・経済・宗務を牛耳る権力者であった。③クラークは前アンコール時代特有の冠称である。王に直属せず、統治においてはムラターンの部下であった。④クロンはクラークに次ぐ、「現場を取り仕切る第二線級の担当者」（p. 348）である。⑤ポンはムラターンの下僚で実務担当者だが、自身多大の財貨を所有し寄進する力があつた。⑥その他の諸職の長。他方で、冠称をもたない人々がいた。僧侶は冠称をもたなかった。一般の村民は冠称も寄進するほどの財力ももたなかった。その他にクニム（隷属民または奴隷）がいた。クニムには寺院に寄進されその境域に住む「寺院のクニム」と村に住む「稲田のクニム」がいた。

冠称の分析という「新しい方法論」（p. 371）によって、カンボジア社会の身分、階層が明らかにされた。冠称者たちは寺院に寄進する財力があり、上から下までの支配階層をなし、官僚制に代わって統治装置を構成して、行政実務を行ったとされる。これらが統治装置としてどのように編成されたかは第9章第1節の前半で明らかにされる。「聖」と「俗」の関係や支配層の構成、隷属民など社会構成や政治社会学的諸側面について、本書は他の諸地域との比較研究のための基盤を提供して、その意義はたいへん大きい。

ここでインド化との関連で一言しておきたい。プラとくにその中心地の住民に関する記述が少ないとはいうものの、本書からカンボジア社会は支配階層と一般村民とクニムからなり、その他に僧侶がいるという大枠が見えてくる。とすれば、東南アジアの伝統社会に広く見られる支配層（宗教者を含む）・平民・隷属民という3身分制に符合するであろう。著者はとくに論じないが、古代カンボジアの社会身分の構成は、バラモン・クシャトリア・ヴァイシャ・シュードラとその枠下の不可触民の5身分からなるインドのヴァルナ制とは無縁であり、したがって社会構成においてインド化は見られないことがわかる。あわせて、本書は有力家系の系譜をいくつも再構成しているが、系譜からみてカンボジアの親族組織は母系であるという（p. 551）。この点でもインド化は無縁であることがわかる。

あえて望蜀の言を述べるならば、こうした社会構成に関する議論は第3部つまりアンコール時代に（どの程度）当てはまるのか、明示的な説明はなされていない。今後の課題なのであろう。またこの方法論には、冠称もなく寄進するほどの財もない一般の村人の実態にせまるのが困難という限界もある。したがって、各種の職人（大工・木工・建具・石工・鍛冶・金属細工・陶工・編物・皮革加工等々）が浮かび上がりにくい。それら手工業のどの部分を村人やクニムが兼ねてこなしていたのか、どの部分は専門職がいたのか気になるところである。各種手工業は国内の商品流通の問題に、また寺院の各種法具や王宮・王族の装身具・装飾品・威信財等々はどのようにして制作・調達されたのという問題につながる。村の様子については著者自身が監修した『カンボジアの農民』（デルヴェール 2002）が参考になる。

### 第3部 1 ジャヤヴァルマン2世問題とデーヴァラージャ論

第3部（第7～11章）は「アンコール時代の政治と文化」と題するが、実際にはジャヤヴァルマン2世をめぐる政治史（第7章）、王権（デーヴァラージャ論）と世襲祭儀家系（第8章）、廃仏運動とその後（第10章）といった政治と宗教をめぐる

諸問題、また寺院創建を核とする地方拠点開発や道路網による物流ルートの意味が大きな位置を占める。その意味で題目は「政治と文化」よりも「政治と宗教と社会」がふさわしいと思われる。

第7章は「歴史空白とジャヤヴァルマン2世問題」と題する。インドラヴァルマン1世(位877~889)即位までの約100年間、同時代碑文がほとんど知られず、しかもジャヤヴァルマン2世王(位802~834)、3世王(位834~877)自身のものは皆無である。また都城の位置も確認されない。歴史空白とはこのことをさす。その後はこのような長期の空白はない。インドラヴァルマン1世には36個の碑文が知られ、都城ハリハララヤもロリュオス遺跡として明確に確認できる。この王こそ王国の実際の創建者の可能性が高いことは著者も認めている(p.124)。

この歴史空白の一方で、スドック・カク・トム碑文(K.235=1052年)をはじめ、後世の碑文でこの時代、とくに2世王に言及するものが20点を超える。2世王の妻妾に関するものだけで10点あって、9人の妻妾と10人の王子の存在が明らかになる。後世の碑文に依拠することのためにためらいつつも、慎重な吟味の上に2世王と3世王の歴史を再構成するのが本章である。2世王の末年を通説の850年から834年に訂正した上で、770年以後の征討と政略結婚そして祭儀によって全国統一をなし遂げる過程が示される。転機は781年に有力地方勢力シャムププラ(ソンボー)を征服し、その系譜中に自身を位置づけることによって所属不明の立場から王位請求権を入手したことであり、あわせてその地のデーヴァラージャ信仰を取り込んだことであった。

3世王が10人の王子の中から王位に就きえたのは、母方の実力者ルドラヴァルマン(2世王の妃の母方叔父)とその一族の力によるものであり、インドラヴァルマン1世はルドラヴァルマンの直系の孫である(p.441の系譜参照)。とすれば、このルドラヴァルマンこそ王朝の実際の始祖かもしれない。

第8章「アンコール時代の宗教と政治」はデーヴァラージャ信仰の思想とその由来、道具立て、担い手たる祭儀家系を精査する。著者はこの王権

論を、サンスクリット語のデーヴァラージャよりも、クメール語の「宇宙の主、それは王なり」という語義(p.469)のカムラテン・ジャガット・タ・ラージャ(以下、KJTR)によって「神なる王」を意味するものとして、精霊信仰の延長上に理解しようとしている。道具立てでは一連の祭祀、王の特別のリング(国家鎮護寺院の本尊として祀る)、および生前に諡号(または法名)を有することがとくに重要であり、これらをとおして王は現人神であると主張する。特別のリングは王とリング(シヴァ神)と守護精霊が一体化したものと位置づけられる。その際、リング崇拝が精霊信仰と同質であって村人に受け入れやすいものだったことが重要である(p.457)。802年にジャヤヴァルマン2世が突如始めたのではなく、地方の支配者たちが自身を神のごとくに見せるために行っていたものがこの時国家儀礼に昇華したのであった(p.455)。KJTR王権論が、その後に壮大な大伽藍を次々に建立される理論的源泉になったとされる(p.474)。ジャヤヴァルマン7世に代表される大建築の背景の解明に著者の関心が向いているのは明らかであり、ここにその答えを見いだしている。

KJTR論の中で「特別のリング」が強調され、それが国家鎮護寺院の本尊として祀られるという。大乘仏教徒ジャヤヴァルマン7世の場合は大きな仏像が本尊であった(p.555)。遺物ではヒンドゥー諸神のなかでヴィシュヌ神も有力であり、事実ヴィシュヌ神を奉じる王も少なくない(p.555)。その場合に本尊はリングではなくヴィシュヌ像と推測されるが、明確な言及はない。ジャヤヴァルマン8世の場合はハリハラ像であろうか(p.634)。

第8章第1節は、結局のところスドック・カク・トム碑文(K.235=1052年)の解釈の学となっている。先行研究と異なる新たな理解であるとのことだが、先行研究が具体的に紹介されないもので、どのように異なるのか門外漢には把握できない。また、そのような王権論が11世紀半ば以後も有効か、どのような展開を見せたか明示されないのが残念である。とりわけ王の特別のリングやKJTRへの言及は11世紀半ば以後の碑文でも続くのかどうか不明である。仮にKJTRを明記する碑



文がないのなら、ここで時代が区分されるべきかもしれない。ところで、各地方でKJTR信仰が行われていたとすれば、地方支配者も神であり、中央の王はそれら神々の中の王であるので、デーヴァラージャというサンスクリット語の「神々の王」という語義が生きてくるのではなかろうか〔榎本2013参照〕。

第2節と第3節は王権と祭司家系の相互補完関係を論じ、政治の動態を明らかにする。10世紀前半の約20年間コーケーに遷都したジャヤヴァルマン4世の場合（第2節）と11世紀後半に新王家（マヒーダラブラ家）が登場したとき（第3節）を取りあげ、新政権とこれを支える新宗教権威の相互依存関係のみならず、新旧司祭家系間の対立と浮沈が明らかにされる。第2節で地域開発の視点から寺院創建を取り上げるのが議論の本筋とは別に興味深い。

### 第3部 2 アンコール時代の政治・法・宗教・社会

第9章は「アンコール時代の社会正義」という題目であるが、第1節と第2節は社会正義というテーマに直接関係せず、統治体制（疑似官僚制、税、軍隊、支配層の給与保有地など）、王権論、交易・交通ネットワークと帝国論である。統治機構については第6章第1節のつづきとして、王権論は第8章のつづきとして読むとわかりやすい。内陸道路網の研究は本書全体のなかでやや異質な調査趣意書というべきものであり、精細な碑文研究が今後どのように生かされるか注目したい。

第3節から精緻な碑文研究に戻って、王権にとっての法の位置や法廷の構成が解明され、また訴訟の進行が史料に則して具体例を示しつつ明らかにされる。第4節では刑罰体系をやはり具体的な刑罰（身体罰や罰金）によって示しつつ、その背後の法思想や刑罰概念や刑の執行を解明しようとする。ここでは『高夷雑誌』『真臘風土記』などの漢籍も重要な史料である。

第10章「廃仏毀釈事件をめぐる13世紀のアンコール王朝」は13世紀についてまったく新しい見方を提示する。きっかけは著者自身が関わったバンテアイ・クダイ寺院の調査現場における、埋納

された廃棄仏の破片280点の発見（2001年と2010年）である。ジャヤヴァルマン7世時代の大乗仏教全盛から一転、シヴァ教徒ジャヤヴァルマン8世（位1243頃～1295頃）により強烈な廃仏運動が展開された証拠と位置づけられる。このとき45,000体以上の石像と浮き彫りが破壊されたという（p.640）。あわせてパイヨンはじめ仏教寺院のヒンドゥー教寺院への改修が積極的に進められた。7世王以後は見ざるべきものがないという従来の史観を根底から覆すものである。8世王による改修後のきらびやかな寺院を描写しているものとして『真臘風土記』の記述を正しく位置づけなおすことにもなる。14世紀にかけてアンコール王朝は依然活力を維持していて、その滅亡について通説の建寺疲勞説は成り立たず、原因は14世紀半ば以後のアユタヤの侵攻にもとめるべきである（p.643）。こうしてアンコール放棄（1431）まで2世紀あまりあった歴史の事実上の空白は1世紀あまりに短縮されることになる。

なお14世紀には上座仏教化が急速に進展したとされるが（p.627）、その根拠は示されない。また著者が上座仏教テラスとよぶ遺構がアンコール・トム都城内に多数見つかっているというが、上座仏教テラスとは何かの説明がなく、その遺構を上座仏教に結びつける根拠も示されない。この章ではまた、そもそも碑文が乏しいためだが、史料的根拠の明確でない叙述があることに読者は注意が必要である。

第11章「アンコール王朝と同時代の東南アジア多文明世界」の第1節と第2節は、いま著者が強い関心を抱くアンコールを中心とする流通ネットワークを第9章第1節につづいて再度取りあげる。第3～5節は本書全体のまとめをなすもので、アンコール・ワットに収斂するアンコール文明をどのように理解するか、王の立場から、また村人の立場から思想的、文明史的な議論がなされる。その上で、著者はあらためて碑文研究の必要性和有効性を強調する。

### 課題と展望

つぎに評者の問題関心にもとづいて今後の研究

課題をいくつか提示しておきたい。

### 1. 漢文史料の扱い

第3章と第4章では漢文史料と碑文史料を突き合わせて情報を取捨選択する必要があり、その前提として各々の史料批判が重要である。ここでは著者の漢文史料の扱いに不十分な面があることを3点について記しておきたい。

第一は『梁書』扶南伝が「庶子の留陀跋摩（ルドラヴァルマン）が嫡弟を殺して王位についた」と記すことに関わる。著者は嫡庶の別を無視した「不法な即位」と報じていると批判するが（p. 150 他）、隋の煬帝や唐の太宗は父を殺したり皇太子たる長兄を殺したりするというもっとすさまじいクーデタにより即位しているのであるから、不法な即位に異論があるとまで深読みする必要はなく、カンボジアに通用の実力主義の反映と理解しておいてよいと思われる。

第二に真臘が扶南を滅亡させた経緯であるが、評者は本書に触発されて別稿を書いたのでこれを参照されたい [深見 2016]。梁の大同年間（535～546）に真臘が扶南をはじめ併合したこと、扶南は7世紀末まで存続していることがとくに重要である。

第三に水真臘・陸真臘・文単に関する記述の混乱を漢文史料の情報源の混乱（p. 231）と位置づけることである。混乱は情報源というよりも『唐会要』『旧唐書』の編纂過程で生じたと思われる。著者が指摘するとおり『新唐書』が正しいが、それは編纂過程に混乱がなかったのである。すなわち唐代の真臘の朝貢については、原史料により近いと思われる『冊府元龜』を中心に整理すれば無用の混乱は避けられたであろう。なお『太平御覧』（p. 201）は『旧唐書』からの引用なので取りあげに足りない。

### 2. 時代区分の問題

第1次インド化を認めるか否か記述が揺れていることはすでに指摘した。著者がセデスの研究を乗り越えようとしていることは本書からさまざまに明らかであるものの、セデスによる時代区分の枠組みを否定するのにためらいがあるのかもしれない。

前アンコール時代とアンコール時代という時代区分が「流動的であること」を著者は指摘しつつも（p. 127）、また統一国家（著者は民族国家（p. 653）という）は実質的には9世紀後半にインドラヴァルマン1世により実現するとの見方を紹介しつつも（p. 124）、結局9世紀初めの時代区分に戻っている。著者は前者を古代、後者を中世とよぶこともあるが（pp. 475, 653-656 他）、この古代・中世という用語の意味内容についてとくに説明はなく、後者はジャヤヴァルマン2世による統一国家の形成（802）からアユタヤによるアンコール陥落（1431）までのアンコール時代6世紀半である。仮にアンコール王朝の実質的な始まりが9世紀後半だとして、他方で第10章のいうように14世紀初め頃まで活力を保持していたとすれば、それは実態としては、通説のいう6世紀半ではなく4世紀余りということになる。先に述べたように、KJTRの王権論に11世紀半以後史料的裏付けがないとすれば、ここにも何らかの画期を認めるべきかもしれない。

政治史における時代区分の問題の他に、第5章や第6章においてみごとに描き出された社会構成や聖俗の関係がアンコール時代たとえば11世紀にも有効なのか、また第9章の社会正義の姿がアンコール時代の全期間にわたって不変だったのかという疑問がある。総じて本書には時代区分への強い意志はうかがえないという印象である。

### 3. なぜアンコール地域なのか

クメールの都が6世紀以上もの長期間アンコールにあったゆえ6世紀以上にわたるアンコール時代がある。これほど都が固定的なのは東南アジア史では例外である。何がこの例外をもたらしたのだろうか。東南アジアで人の移動性の高いことはつとに指摘されているが、権力の中心もまたよく移動した。東アジア世界に入ってしまったハノイを別にして、ヴィジャヤとアユタヤは例外である。5世紀近く続いたヴィジャヤは国際中継港と内陸物産積み出し港という機能を持ち、その中心的地位は同じ機能をもつ阮氏広南国に引き継がれた。4世紀続いたアユタヤは河川交通の要という地理的要因があり、その地位はバンコクが継承した。両

者は海域世界と内陸世界の地理的な接点として変化しにくかったのである。

では内陸のアンコールはなぜ6世紀以上も中心だったのだろうか。バガンとマジヤパヒトは2世紀半で消えたのだから「農業立国」は長期持続する(p. 669)とはいえないのである。カンボジア平原には他の選択肢がないわけではなく、著者が強調するように、地方に5つの中心があり、事実コーケーに遷都したこともある。しかしその期間は20年にすぎず、実態はアンコールと2政権並立だったらしい(p. 480)。アンコールには聖山クレーン山に発する聖河シェムリアップ河が流れているという王権論的、宇宙論的な説明(p. 416 他)が可能かもしれないが、それだけで十分なのだろうか。

#### 4. 実力の中身はなにか

カンボジア王権における実力主義の一端が『梁書』にも現れていることは先に述べたが、問題はその実力とその背景である。アンコール時代の26人の王は血縁や世襲によるのではなく実力で王位についたことが繰り返し強調される。後付けの系譜操作や即位後の儀礼および大規模な土木建築事業の背景がかなりよく説明されるように思われる。ひるがえって、即位以前にはどのようにして力を集積するのか問うてみると、必ずしも明らかでない。軍隊や統治装置を編成し動員しライバルを倒す力の源泉はどのようなものだったのであろうか。実力の中身が見えてこないという印象である。とりわけ第5章や第6章が描くような階層社会の中からどのようにして実力者が現れるのか、実力による王位争奪が繰り返されるのはなぜなのか。階層社会はどれほど安定的あるいは流動的だったのだろうか。階層間移動、社会的・政治的な上昇あるいは没落はどの程度だったのだろうか。豊臣秀吉のように低い身分から成り上がるようなことまであったのだろうか。王者となった後の粉飾された史料しか残らないのでわかりようがないのだろうか。

ところで、東南アジアで王位獲得の実力主義はアンコールに限らない。比較研究のテーマとして興味深いであろう。マレーでもジャワでも王位を主張しうる王族の幅が広いのが主な背景である。

マレーでは王位争いが海賊行為と結びつきやすく[太田 2015]、ジャワでは権力概念として思想的な議論がなされる[アンダーソン 1995]という各々の特徴もある。くわえて、マレーではミナンカバウ人冒険者(マレー人貴種伝説もある)ラジャ・クチルがシアック王国を乗っ取った例や、ジャワではバタヴィアのバリ人奴隷のスロパティが東部ジャワに王国を築いたように、低い出自から成り上がったこともある。

#### 5. 農業史観は適切か

「扶南は豊饒なメコン川デルタ地帯に誕生し、農業生産により立国していた」(p. 146)とするのをはじめ、本書は一貫して豊かな農業生産を主張し、その上にたつ社会と国家というイメージを表出する。これは適切だろうか。3世紀の扶南大王范蔓の「開地五六千里」(『梁書』扶南伝)を農業開発の文脈で捉えるのは(pp. 167-168)、林邑から扶南までが三千里(同じく『梁書』扶南伝)というスケールであるから、とうてい受け入れがたい。東南アジア大陸部の巨大デルタの開発は19世紀半ばにようやく始まったのであり、雨季に全面冠水するようなデルタではそれまで居住適地は微高地(p. 147)に限られていた。メコン・デルタに「多くの人口を養える自然条件」(p. 168)が備わっていたとは考えにくい。大湿地帯でみつかったK. 5 碑文にいう「泥土を処理した」(p. 149)とは、排水路改修による耕地造成(p. 170)といった農業開発というより、交通路、居住空間ないし寺院空間の整備ではないだろうか。前アンコール時代の農業を「犁耕稲作、散播、鎌刈り」と特徴づける(p. 238)のも疑問で、これは平原農耕つまりアンコール時代の農法とすべきであろう[高谷 1985: 76, 213-214]。

著者はアンコール王朝を「東南アジア大陸部に君臨した農業立国の大帝国」(p. 559)、「内陸農業国家」(p. 560)と位置づけ、その背景に大貯水池バライの水による乾季の稲作を考えている(pp. 549, 674 他)。しかし農学者たちは乾季の大規模灌漑稲作に否定的である[同上書: 212-215; 福井 1999; 2009]。とりわけ西バライの堤防は現在水面より10メートルほど高く、この水を利用するに

は堤防下部に水門と水路が必要だが、そうした取水設備や取水後の配水路の痕跡は確認されていない。

もっとも農業史観を強調し、「自給自足的な生業」(p.240 他)を唱える一方で、交通・交易・物流の重要性を著者は忘れていない。東北タイの鉄や塩 (p.546) はじめ域内外の品物の流れとそのためインフラとなった道路の建設とその意味に、むしろ近年の著者は大きな関心をむけている。この点ではとくに第 8 章第 1 節で寺院建築を核とする地方の開発という新しい視点が示され、こうした形態の開拓移住の上に、第 9 章第 1 節と第 11 章ではそれら拠点を結ぶ盛土された幹線道路(石橋をとまう)の建設の意味を明らかにしようとする。道路建設は碑文に記されないで (p.547)、内戦が終わり地雷もほぼ処理されて環境がよくなった現在、臨地調査を含めた新しい方法論の開発が待たれる。

(深見純生)

#### 参考文献

- アンダーソン, ベネディクト・R. O'G. 1995. 「ジャワ文化における権力観」『言葉と権力——インドネシアの政治文化探求』中島成久(訳), 31-108 ページ所収。東京:日本エディタースクール出版部。(原著 Anderson, Benedict R. O'G. 1972. *The Idea of Power in Javanese Culture*. In *Culture and Politics in Indonesia*, edited by Claire Holt. Ithaca and London: Cornell University Press.)
- 青山 亨. 2001. 「東ジャワの統一王権——アイルランガ政権からクディリ王国へ」『岩波講座 東南アジア史 2』, 141-167 ページ所収。東京:岩波書店。
- デルヴェール, J. 2002. 『カンボジアの農民 自然・社会・文化』及川浩吉(訳), 石澤良昭(監修)。東京:風響社。(原著 Delvert, Jean. 1958. *Le Paysan Cambodgien*. Paris: Mouton.)
- 榎本文雄. 2013. 「devarāja について」『南アジアおよび東南アジアにおけるデーヴァラージャ信仰とその造形に関する基礎的研究』肥塚隆(編), 7-11 ページ所収。大阪大学大学院文学研究科。
- 深見純生. 2001. 「ジャワの初期王権」『岩波講座 東南アジア史 1』, 285-307 ページ所収。東京:岩波書店。
- . 2016. 「三転四起する扶南」『南方文化』42. (印刷中)
- 福井捷朗. 1999. 「農業生態から見たグロリエのアンコール水利社会説批判」『東南アジア研究』36(3): 546-554.
- . 2009 「アンコール文明——バライ灌溉説批判」『東南アジア』春山成子他(編), 73-84 ページ所収。東京:朝倉書店。
- 石澤良昭. 1982. 『古代カンボジア史研究』東京:国書刊行会。
- . 2014. 「西欧来航者が語る『ポスト・アンコール史(十五~十九世紀)』——歴史仮説の構築作業から」『仏教芸術』337: 11-35.
- 太田 淳. 2015. 「貿易と暴力——マレー海域の海賊とオランダ人, 1780~1820 年」『東インド会社とアジアの海賊』東洋文庫(編), 66-106 ページ所収。東京:勉誠出版。
- 高谷好一. 1985. 『東南アジアの自然と土地利用』東京:勁草書房。
- 三重野文晴. 『金融システム改革と東南アジア——長期趨勢と企業金融の実証分析』勁草書房, 2015, 272p.

1980 年代の「ワシントン・コンセンサス」は、市場自由化・民営化を軸とする、発展途上国のための政策処方箋の思想的集大成とみなすことができる。本書の出発点ともいえるアジア経済危機に対しても、米国や国際機関などの「主流派」エコノミストの診断と処方箋はこの思想を受け継いでいる。アジア危機の原因は企業の過剰借入、銀行の過剰貸出にあり、また、その背後には不透明なコーポレート・ガバナンスがあったと診断し、「市場メカニズム」を全面的に活用すべく、証券市場の法整備など、間接金融を代替すべき直接金融の強化がもっとも重要な改革の柱として位置づけられた。証券市場の育成という点では、チェンマ